
聖夜に愛を呪う者ども

runaway

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖夜に愛を呪う者ども

【Nコード】

N6206Z

【作者名】

runaway

【あらすじ】

クリスマスイブの夜、俺たちは居酒屋にいた。もてない男たちが世のリア充を呪わんと聖夜に（酔った勢いで）立ち上がった！だが彼らが呼び込んだのは…。クリスマスにあんまり幸せじゃない人たちの話。

クリスマスイブの夜、俺たちは居酒屋にいた。

イブの晩、彼女のいない寂しさをまぎらわせるために男同士で寄り集まった、色気のかけらもないわびしい酒盛りだ。

だがそんな生傷を舐め合うような会で、気持ちよく酔えるはずもない。

最初のうちのやけくそぎみな空騒ぎが過ぎ去ると、ただひたすらに酒をあおり、ひたすらに世を恨み、ひたすらに愚痴をこぼす情けない集団と成り果ててしまった。

やがて一人が、ごん、とグラスをテーブルに叩きつけるように置いて雄叫びをあげた。

「俺はクリスマスなんか大嫌いだあ！」

すかさず、全員がうなずいて賛同の意を表明する。

「どうしてこの世の中にこんな日がなきゃあならないんだ」

「本当に、消えちまえばいいのになあ」

「どうにかしてなくせないものかなあ」

口々に言い合ううちに、議論がねじれた方向に熱を帯び始める。

「そうだよ、つまり、クリスマスなんてなくなってしまえばいいんだ」

「うん。それが一番だ」

「でもどうする」

「つまり元を叩けばいいんじゃないか？ クリスマスって、神様の誕生日なんだろ」

実はこの時点ですでに間違っている。クリスマスは神の子が人の子として地上に降誕したことを祝う日だ。神様というか神の子だし、生誕を祝う記念日であって、誕生日そのものではない。

だがもちろん、指摘するような理性が残っているやつは誰もいない。

そして今の俺たちにとってクリスマスが本来何をすべき日なのかは問題ではないしどうでもいい。あるのはクリスマスを口実に充実したりアルを二人で愉しむ者がいる。その憎むべき事実だけだ。

誰かがごくりと喉を鳴らした。

「こっ殺すのか？」

「それは極論に過ぎる。つまるところ、日付が特定できなきゃいいんだ」

「ってことは、もっとさかのぼってか」

「受胎告知を邪魔するとかどうだ」

「大天使ガブリエルをか。厳しそうだな」

「いや、ベツレヘムの星を博士どもから隠すぐらいでいけるんじゃないか」

「うん。いいかも」

「じゃあ、やるか」

「やるぞうー！」

「おー！」

話がまとまり、みんなで氣勢をあげる。

そっだ、俺たちにはできる。

ささくれ、荒んだ気持ちに取って代わって、心地よい高揚が一丸となった魂を満たした。

だが俺たちが一致団結してことを起こそうとしたそのとき、座敷のふすまが勢いよく開いた。

青い制服に制帽姿の人影が三つ。

先頭の一人が一喝する。

「こらー！ 何をする気だ！」

何をする気って、まだ何もしていないじゃないか。

いくらおまわりさんだって、未遂にすらなっていない段階でその言い草はないんじゃないか。

文句を言おうとしたところで、メンバーの一人が呟く声が耳に入った。

「やべえ、時空警察だ」

見れば、確かに先頭の警官の片目はぎょろりと青白く光る人工魔眼だ。

さらに、後ろに控える二人のうち片方はヘッドセットと一体になったごついゴーグルを着用し、もう片方は左腕に装着したハンドヘルドコンピューターのモニターで何かをチェックしている。

どこから見ても正しい時空警察、過去と未来の秩序を護る時の番人タイムパトロールのいでたちだ。

店員が俺たちの会話を盗み聞きして通報し、彼らは魔力が働き出すタイミングを見計らって踏み込んできたということらしい。

時空警察官が装備する三者三様の計器には、今の俺たちが使いか

けた術による時間連続線の歪曲波動がしっかりと記録されている。言い逃れはできない。

「あのね、そんなことできるわけないし、したって無駄なの。判るよね？」

全員分の違反キップをプリントアウトする間に、時空警察官は俺たちを諭した。

「クリスマスがなくなったって、今度はバレンタインデーがメインになるだけなんだから。それがなくなったって、ひなまつりとか体育の日とかが結局は代わりになるに違いないんだよ。

もし敬老の日にカップルの予約でレストランが埋まっちゃったら、おじいさんおばあさんになけなしのお小遣いをはたいてご馳走しようとした優しい孫が悲しむでしょ？」

説得力のあるようなないような説教をうなだれて拝聴していると、ゴーグル男のインカムのアクセスランプが点灯した。

「こちら二隊。現在地ははんぺん小路の居酒屋です。どうぞ」

ゴーグル男は応答を告げてから、目の前の何かを読み上げるように少し頭を左右に動かした。一段低くなった声音で魔眼男に報告する。

「さつまあげ通りの喫茶店『アプフェルトルテ』の店員から通報です。客の挙動がおかしいそうです」

「おかしい？」

「カップルで来店後、女が先に出て行って、残った男が“全部やり直したい”と繰り返しているそうです」

「ああ……」

魔眼男が短くうめく。

「クリスマスなんか大嫌いだ……」

ハンドヘルドコンピューター男が違反キップを次々切りながら毒づいた。

「では、いずれ通知が行くと思うから、後日免許証持参で出頭するように」

そう言い置いて、三人の時空警察官は立ち去った。閉じたふすまの向こうで、彼らの長靴が足早に床を叩く音が遠ざかっていく。硬い足音に紛れて、うんざりした響きのやりとりが届いた。

「また通報です。がんもどき横丁のマジェランガイド三ツ星フランス料理店からだそうですが、どうしますか……」

「なんだと、先刻行った店じゃないか。別件か？」

どのみち当隊は無理だな。三隊か五隊に要請するように伝えてくれ」

「クリスマスなんか大嫌いだ……」

窓側に行つて見下ろすと、彼らが店を出たところだった。男たちは外套の襟を立て、背中を丸めて小雪舞う街路をさつまあげ通り方面に消えていった。

「……」

哀愁漂うその背中を見送ってから、俺たちは肅々と違反キップを

懷に仕舞った。しかる後に店員を呼んで、各々が一番好きな酒をラストオーダーとして注文する。

そして自分たちよりも幸薄き人々の存在を思い描きながら、心安らかに思い思いの一献を味わった。

(後書き)

メリークリスマス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6206z/>

聖夜に愛を呪う者ども

2011年12月20日21時45分発行